

六八年五月から遠く離れて

——五月の出来事を記念すること¹

西山雄二
(首都大学東京)

ある歴史的出来事を回顧するにあたって、40周年から50周年は記憶と歴史が交錯する大きな節目である。当事者が高齢になり証言や回想録がピークに達すると同時に、後続世代による歴史的考察や資料編纂が始まるからだ。六八年の出来事は40周年の2008年にもっとも盛んに議論された。新自由主義的保守ニコラ・サルコジ大統領が選挙期間中から「六八年五月の清算」を掲げ、フランスにはびこる諸悪の原因が五月の無秩序さ、無責任さにあると喧伝したからだ。だが2018年、六八年の後に生まれた若きマクロン大統領からそうした無節操な攻撃はなく、むしろ2017年秋には公式の記念行事について側近に相談したとさえ伝えられた。ただ、年が明けると、記念式典に国民的威信を回復させる政治的効果はないとみなされ、計画はどこかに消え失せていた。結局、大統領は、「六八年五月とはかつての運動でした。それは過ぎ去ったことです。私たちは別の情勢にいるのです」²と言い放ったのだった。2018年はむしろ穏やかな雰囲気なかで、いささかノスタルジックな調子で数々の記念行事がおこなわれた³。

¹ 本稿は「週刊読書人」(第3243-3246号)に連載された「パリ、五月革命の残光」に大幅に加筆が施されたものである。転載を許可くださった明石健五・編集者に深く感謝申し上げる。

² « L'histoire redevient tragique. Une rencontre avec Emmanuel Macron », *La Nouvelle Revue française*, n° 630, mai 2018, p. 85.

³ 五月の騒乱を象徴するのがカルチエ・ラタンで勃発した学生と機動隊による攻防戦である。2018年はこの学生街のいたるところに音声ガイド「六八年五月 カルチエ・ラタンへの回帰 [Mai 68 : retour au quartier Latin]」が設けられた。専用のアプリケーションをインストールしたスマートフォンをかざしてQRコードを読み取ると、その地点の当時の音声の流れ、騒乱を体験できるようになっていた。

2018年の春には、大学改革に抵抗して多くの大学で学生によるキャンパスの占拠と封鎖がおこなわれ、冬にはマクロン大統領の富裕層優遇の政策に抗して「黄色いベスト」運動が自然発生的に展開された。50周年を機に六八年の運動が再来したとも語られたが、実際はいずれの運動も五月革命との相違点の方が目につき、むしろ現在の私たちが六八年から遠く離れたことを実感させられた⁴。

1. 六八年に関する刊行物

刊行物に関しては、2018年も証言集や回顧録、研究書、アンソロジー集、図録や写真集などが多数出版された。40周年には『六八年五月事典』⁵が刊行されたが、今年は大衆向けの入門書・クセジュ文庫として『六八年五月』⁶が刊行されたことは象徴的だった。

歴史研究者リュディヴィヌ・バンティニがフランス全土の膨大な資料群を調べ上げて、体制側の動向も含めて六八年を描き出した大著『一九六八年——偉大な夕べから有明へ』はとりわけ注目を集めた。バンティニは1960年代に徐々に高まっていた単能工（Ouvrier Spécialisé : OS）や農民、学生らによる抗議運動に着目する。技術化の進展とともに工場労働者の解雇や賃上げの停滞が起こっており、1967年2-3月にブザンソンのロディアセタ社で大争議が⁷、1968年1-2月にカーン、1968年3月にルドンでは数十日間にわたるストライキがおこなわれた。数千人の労働者が待遇改善を求めてストライキを継続し、機動隊（CRS）とも衝突を繰り返した。また、フランス全国学生連盟（UNEF）が運動に賛同してピケに参加し、労働者た

⁴ 六八年50周年に関する優れた日本語文献として、関大聡「フランス『六八年五月』五〇周年の報告」（「情況」2018年秋号）を参照されたい。日本では紹介されていない、極右運動の台頭と五月の関係が指摘されており、2018年の学生運動との連続と断絶もくわしく分析されている。また、「黄色いベスト」運動との相違については、本号の大嶋えり子の論考末尾を参照されたい。

⁵ *Dictionnaire de mai 68*, dir. par Jacques Capdevielle et Henri Rey, Larousse, 2008.

⁶ Bibia Pavard, *Mai 68*, PUF, collection « Que sais-je? », 2018.

⁷ クリス・マルケルは争議の現場に入り、労働者に表現手段を与えるために映画「また近いうちに [À bientôt, j'espère]」（1968年）を製作した。その後、マルケルはゴダールやレネらと「シネトラクト」という活動を展開するが、この点については、本号の須藤健太郎による「シネトラクトせよ！」の翻訳と解説を参照されたい。

ちも大学に情況の説明に來たという。労働者や農民、学生の連帯と運動は各地で起こっており、五月という「有明」に向けた「偉大なる夕べ」（フランス語で社会主義革命達成の日を指す表現）の気配がすでにフランス全土で燻っていたのだ。

証言集はこれまでたびたび刊行されてきたが、50周年の節目にもいくつか出版された。『世界を変えること、自分の生き方を変えること』⁸は約30名の研究者が4年にわたってパリと地方大都市で調査・収集した証言を集めた著作で、機動隊員から労働組合員、極左活動家やフェミニストまで多彩な歴史的証言が詰まっている。また、はじめてネットメディアの主導で証言集が編纂された。2008年に創設されて人気を得ている独立ネットサイト「メディアパール [Mediapart]」は六八年の証言を募集し、約300の証言から150を選別して、歴史家らの編集で『六八年五月を生きた人々』⁹を刊行した。いずれの証言集も多種多様な人々の経験を公表することで、六八年の記憶の多様化を目指している¹⁰。

ボルドー、リヨン、マルセイユといった大都市でおこった出来事に関する数々の書籍も刊行され、パリとは異なる各地方の動向が明らかになった¹¹。また、クリスチャン・ブジェアルによれば、ブルターニュ地方では、すでに1967年夏に、ルド

⁸ *Charger le monde, changer sa vie*, dir. par Olivier Fillieule et al., Actes Sud, 2018.

⁹ *Mai 68 par celles et ceux qui l'ont vécu*, coordonné par Christelle Dormoy-Rajramanan, Boris Gobille et Erik Neveu, Les éditions de l'Atelier en partenariat avec Médiapart, 2018.

¹⁰ 証言の多様化という点で言えば、五月を体験した日本人の鈴木道彦と西川長夫の著作がこの節目に刊行されたことも特筆すべきだろう。鈴木道彦の『私の1968年』（閏月社）では、羽田事件の試練に曝される日本の民主主義、アルジェリア戦争における脱走兵の問題、ファノンにおける植民地主義と暴力の思想、金嬉老事件と在日朝鮮人の問題など、彼自身の社会実践の文脈で五月の出来事が語られる。西川長夫『決定版 パリ五月革命 私論——転換点としての1968年』（平凡社ライブラリー）では、世界史的転換点として六八年が規定され、著者自身の豊かな体験記とともに知識人の問題や五月の記憶継承の問いが考察される。今回注目すべき点は西川祐子による詳細な回想録「わたしたちの一人として」が添えられたことで、西川長夫の記述に立体的な厚みをもたらしている。

¹¹ Pierre Brana et Joëlle Dusseau, *Mai 68 à Bordeaux*, La Geste, 2017 ; Collectif de la Grande Côte, *Lyon en luttés dans les années 68*, Presses universitaires de Lyon, 2018 ; *Marseille années 68*, dir. par Olivier Fillieule et Isabelle Sommier, Presses de Sciences Po, 2018.



2018年春、大学改革に抗議して封鎖されたパリ・ナンテール西大学でのポスター。六八年五月の写真やポスター・デザインが活用されている。写真提供=松葉類。



2018年春、パリのいくつかの書店で六八年に関する書籍コーナーが設けられた。写真 = 西山雄二。

ンやカンペール、フジェールで、困難な状況にあった農民や靴工場の労働者らが激しいデモをおこない、治安機動隊に対して路上の敷石を投げつけている¹²。

50年の歳月が経ったことを実感させるのは子供や青少年向けの刊行物である。『子供に語る六八年五月』¹³や、イラスト付きの大型本（アルバム）として『五月のヴェロ』『1968年のストを経験したマリアヌの本当の物語』『18歳で不可能なことを要求しよう——六八年五月の日記』『春になると街路は活気づく』¹⁴が刊行された。これらの本では、子供や若者の目線で（登場人物の年齢はそれぞれ9歳、10歳、18歳、24歳）五月のパリを追体験するような描写になっている。

五月の象徴的人物ダニエル・コーン＝ベンディッドは40周年の際に『六八年を忘れよう』¹⁵を著して物議を醸した。もっとも、扇情的な題名とは異なり、五月の否定ではなく、五月を発端として別の仕方では社会を構想しようというのが彼の意図であった。50周年の今年は何も発言しないとして、コーン＝ベンディッドは愛好するサッカーに関する著書『スパイクシューズの下に砂地が〔*Sous les crampons... la plage*〕』¹⁶を出した。六八年には警官隊と対峙する学生らが街路の敷石を剥がした際、露出した砂地を指して「敷石の下に砂浜が〔*Sous les pavés, la plage*〕」と詩的に表現したが、その皮肉なもじりである。また、彼はロマン・ゲーピル監督とともにドキュメンタリー映画「横断」¹⁷を製作した。彼らはマクロン大統領支持を表明

¹² Christian Bougeard, *Les Années 68 en Bretagne. Les mutations d'une société (1962-1981)*, PUR, 2018.

¹³ Philippe Godard, *Mai 68, raconté aux enfants*, De la Martinière jeunesse, 2018.

¹⁴ Pascale Bouchie, *Véro en mai*, Illustrations de Yvan Pommaux, École des Loisirs, 2018 ; Pascale Bouchie, *La véritable histoire de Marianne qui vécut la grève de 1968*, Illustrations de Elisa Laget, Bayard Jeunesse, 2018 ; Regnault Adeline, *A 18 Ans Demandons L'Impossible - Mon Journal De Mai 68*, Casterman, 2018 ; Max Curry, *Au printemps fleurissent les pavés*, Dessins de Hubert Poirot-Bourdain, De la Martinière jeunesse, 2018.

¹⁵ Daniel Cohn-Bendit, *Forget 68*, Aube, 2008.

¹⁶ Daniel Cohn-Bendit, *Sous les crampons... la plage*, avec Patrice Lemoine, Robert Laffont, 2018. 皮肉な題名の本を刊行したからといって、コーン＝ベンディッドが六八年五月を否定する陣営に回ったわけではないことは序文で明記されている。

¹⁷ *La traversée*, réalisé par Romain Goupil, avec Daniel Cohn-Bendit, 2018. 「横断」はコーン＝ベンディッドとゲーピルがフランス全土を旅するロード・ムービー。医療関係者、囚人、先生、難民とその支援者、失業者、キリストおよびイスラムの聖職者、極右支持者など、彼らが各地で名もなき人々と会話をし、ときに議論する様子が淡々と綴られていく。

しているが、映画ではカフェに突然マクロンが現れて、難民政策に関する対話が始まるというシュールな展開がみられる。

雑誌特集も数冊組まれたが¹⁸、ミシェル・ヴィヴィオルカによる「ソシオ」誌（第10号）の特集「六八年五月と人文・社会科学」¹⁹が読み応えがある。アラン・トゥレーヌによれば、すでにダダやシュルレアリスムの運動にその発端がみられるが、五月によって社会運動が政治的な領域から文化的な領域に移行したという。「六八年に関する主な誤解、六八年世代自身もしばしば犯してしまう誤解はその統一性という観念だ」²⁰。六八年の運動は分離や敵対を含んだネットワーク的な運動で、これは今日でも参照すべき点である。エドガー・モランは、当時「ル・モンド」紙にいち早く記事「学生コミューン」を発表したが、五月は革命ではなく、西洋の文明社会に「裂け目」をもたらしたと再確認する。「何も変化させないで、とくに、慣習、感情、考え方の面で多くのことが変化した」「六八年は若い学生が抱いていたきわめて奥深い渴望を具現化した。さらなる自由、自律と博愛や共同性への渴望を」²¹。

多くの著作が刊行されるなか、五月の代表的な論考を集めた選集や再刊本も目立つ。サルトルらの論考を取めた『六八年五月を記念する?』²²、「デバ」誌40周年特集号の文庫版²³、精神分析家アントワネット・フークなど女性らの選集『女性と娘たち——六八年五月』²⁴などである。五月に関する出版はピークを過ぎて、従来の六八年

¹⁸ Cf. *Études françaises*, Volume 54, Numéro 1, « Écritures de la contestation. La littérature des années 68 », Les Presse de l'Université de Montréal, 2018 ; *Le Débat*, 2018/4 (n° 201), Gallimard, septembre-octobre 2018.

¹⁹ *Socio*, « 1968-2018 », dir. par Michel Wieviorka, No.10, 2018.

²⁰ Alain Touraine et Michel Wieviorka « Du social au culturel », *Socio*, No.10, 2018, p. 43.

²¹ Edgar Morin et Michel Wieviorka « La réalisation d'un événement impossible », *Socio*, No.10, 2018, p. 62-63.

²² *Commémorer Mai 68?*, Jean-Paul Aron et al., Préface de Sophie Doudet, Gallimard, collection « Folio », 2018.

²³ *Mai 68, Le Débat*, Jacques Baynac et al., Gallimard, collection « Folio », 2018.

²⁴ *Femmes et filles : Mai 1968*, dir. par Pascale de Langautier et Inès de Warren, L'Herne, 2018. 性的被害を告発する「Me Too運動」の前年からの世界的な広がりを受けたこともあり、2018年には、女性運動という論点から五月を論じた書籍がいくつか刊行された。そうした論点については、本号の佐藤香織の論考を参照されたい。

論を回顧する時期に来ていることがうかがわれる。だから、ジャン＝ピエール・リウーによる次のような辛辣な評価もあながち間違いではないだろう。「私たちはみなわかっている。六八年の50周年は灰色だ。それはメディアの『ヒマダネ記事』も同然だが、このマロニエの木に花はほとんど咲かない。出版物のいつもの流れは精彩に富んではおらず、売れ行きも芳しくない。要するに、うわの空なのだ」²⁵。出版物が年老いた当事者たちと勤勉な歴史家たちという二極に偏っていることは明らかだ。実際、新たな解釈を打ち出す論争的な著作はほとんどみられない。五月の解釈をめぐる激しい議論が起こることもなく、記憶の多様化と歴史記述の精緻化、過度な神話の脱色化が淡々と進んだのが2018年の出版動向だったと言える。

2. 六八年に関する展示

2018年の春から夏にかけて、パリでは八カ所の会場で六八年に関する展示や催事が企画されていた。

フランス国立美術学校では「闘争状態のイメージ——フランス極左の視覚文化(1968-74年)」が開催された²⁶。六八年前後の異議申し立ての時代をフランスの若い芸術家たちがいかに表現したのかがテーマである。その趣旨は「出来事のたんなるイラストではなく、闘争の地平として産み出されたイメージを考察することで、私たちは歴史をよりよく理解することができるだろうか」、「イメージが創作された文脈に置き直すことで、その本源的な効果を見出し、力強い美的経験を引き起こせるだろうか」。五月革命時に美術学生らが創作したポスターが壁全面に掲示されており、生々しい圧倒的な迫力であった（六八年五月とポスター創作の関係については、本号の齋藤達也の論考を参照されたい）。

フランス国立図書館では「六八年五月のアイコン——イメージに歴史あり」が展示された²⁷。五月の数々の出来事が写真ジャーナリズムを通じて、いかに生成し受容

²⁵ Jean-Pierre Rioux « Un cinquantenaire couleur de muraille », *Le Débat*, 2018/4 (n° 201), Gallimard, septembre-octobre 2018, p. 139.

²⁶ *Images en lutte : La culture visuelle de l'extrême gauche en France (1968-1974)*, dir. par Philippe Artières et Eric de Chasse, ENSBA, 2018.

²⁷ *Icônes de Mai 68 : Les images ont une histoire*, dir. par Dominique Versavel et d'Audrey Leblanc, Bibliothèque nationale de France, 2018.

されたのかを問う企画である。当時の出来事を生々しく伝えた週刊誌「パリ・マッチ」「レクスプレス」「ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール」は、数々の写真イメージによって五月の物語化を紡ぎ出した。たとえば、機動隊と対峙する活動家コーン・ベンディッド、路上でデモ隊に旗を振りかざす女性「五月のマリアヌ」の写真は、後年の刊行物を通じて徐々に象徴的な聖像（アイコン）として流布した。また他方で、多数の学生と警官による「バリケードの夜」には匿名の人々が映し出されるだけで、象徴的人物像が不在である。1967年にギイ・ドゥポールが「スペクタクルの社会」と表現したように、1960年代、視聴覚メディアが発達し、写真や映像が情報伝達の手段のみならず、ポップ・カルチャーやカウンター・カルチャーの表現として活用され始めたのだ。

建築遺産博物館では「六八年五月、建築もまた！」が企画され、六八年の出来事が建築分野、とりわけ美術学校の学生や若き建築家に与えた影響と動向を資料展示した²⁸。1966年頃からすでに美術学校では建築系学生と教師が、当時のフランス現代思想の影響を受けて、理論より実践、アカデミズムより職人的な教育を求める動きが始まっていた。伝統の否定、政治参加、教育の形式と内容の刷新などが六八年の社会的熱気を通じて加速する。戦後の「量」を重視する建築から、「質」を問い直す建築への転換である。建築家と都市計画専門家らは権力装置に奉仕する機能性を拒否し、普遍化・政治化・ラディカル化、要求・理想・欲望といった三位一体が唱えられたのだった。

フランス国立中央文書館でおこなわれた「六八年、権力のアーカイヴ」はもっとも画期的な展示であった。これまで学生や労働者ら運動側の資料や証言は次々と公開されてきたが、今回初めて政府側の資料が公開されたからだ。監修を務めたのは、フーコーの資料責任者でもある歴史家フィリップ・アルティエールである。「権力への異議申し立てとその弱体化を過小評価するのではなく、あくまでも権力の目でそれらを解明すること」と注意を促しつつ、アルティエールは図録でこう記している。「六八年は遠くなってしまったが、六八年は抵抗する。」「本書は六八年に関する『真実』を読み取るようにうながすものではない。権力側のアーカイヴが開かれるこ

²⁸ *Mai 68. L'architecture aussi!*, dir. par Caroline Maniaque, Éléonore Marantz et Jean-Louis Violeau, Éditions B2, en partenariat avec la Cité de l'architecture & du patrimoine, 2018.



「六八年五月のイコン——イメージに歴史あり」展（フランス国立図書館）。「六八年、権力のアーカイヴ」展（フランス国立中央文書館）。写真＝西山雄二。



2018年5月3日、高等師範学校での集会「大学の死」に参加する哲学者ジョルジョ・アガンベン。従来の意味とは異なる「行動」を再考しようと呼びかけた。5月12日、フランス国立美術学校で夜通し開かれた「哲学の夕べ」。テーマは「六八年五月」で、当時のポスター展示もおこなわれた。写真＝西山雄二。

とで、私たちは闘争運動の順に即して、さまざまな作戦の一覧を発見する。この一覧によって、棄却された作戦、決定されたが実現されなかった作戦など、検討された数々の仮説をうかがい知ることができる」²⁹。五月の騒乱によって社会に「裂け目」（エドガール・モラン）が生じ、停止したかもしれないが、体制は機能し続けていた。体制側は情報を収集し、通達を出し、状況に対処し、日常を管理し、交渉を準備した。展示で明らかにされたのは、巨大な危機に直面した国家の統治の技法であった。

内務省の総合情報局のメモや分析データ（学生と労働者への対策）、作戦リスト。ストで機能しない郵便網に代えて、軍用機で郵便サービスを代替させる計画資料。六月には治安部隊から逃走していた若者が河で溺死したが、その現場検証資料。大統領支持のデモのためのチラシ。五月以後のフォール文科相による大学改革資料。もっとも見応えのあったのは、革命運動に終止符を打った、5月30日のド・ゴール大統領のテレビ・ラジオ演説の原稿で、何度も手書きで修正された跡が重要な歴史的瞬間を物語っている。

以上のように、2018年にパリでは四つの大規模な展示がおこなわれた。六八年の記憶と記録を総合する歴史化が進んでいるが、これらの展示では歴史の生成過程に踏み込んだ多角的な試みがおこなわれ、人々がその動向を立体的に理解できるように促されていた。歴史資料はたしかに地味かもしれないが、しかし、アーカイヴこそが人間の歴史をその深部で形成するのである。

3. 六八年に関する討論

2018年春、パリでは、前述した展示に加えて、ポンピドゥー・センター、国立図書館、国立文書館、パリ・ナンテール大学、パレ・ドゥ・トーキョー、シネマテーク・フランセーズなどで、五月を記念する催事がおこなわれた。

とりわけポンピドゥー・センターは「六八年五月——総会〔Mai 68 : Assemblée générale〕」と題された展示がなされ、50周年を記念する中心的な場となった。4月28-29日の週末には討論会「1968-2018——さまざまな文化革命」が開かれた³⁰。

²⁹ 68, *les archives du pouvoir*, dir. par Philippe Artières et Emmanuelle Giry, L'iconoclaste et les Archives nationales, 2018, p. 19.

³⁰ « 1968-2018 : Les révolutions culturelles », Centre Pompidou, Avec France Culture, 28-29 avril 2018.

ラジオ局フランス・キュルチュールの生放送の形式で、マラソンのように多くのゲストが入れ替わり立ち替わり話をした。

アラン・フィンケルクロートは1968年当時にもっともラディカルに左派に傾倒しなければならないという意気込みで毛沢東主義者になったが、70年代以後はマルクス主義に批判的な立場をとってきた。今回の討論でも、2016年に労働法改正に反対して自然発生的に起こった「屈しない夜」運動は内輪の議論にすぎず、六八年五月の絶対的な民主的議論の解放とは異なると述べた。また、現在、大学改革に反対して各地で大学封鎖が継続されているが、キャンパスを無知なバラック小屋にしているだけだ、と批判的だった。六八年当時は革命的共産主義者同盟(LCR)のリーダーだったアンリ・ウェーバーは、五月の運動は二層からなり、「大海の泡しぶき」と「大海の深層」を区別するべきと証言した。前者はトロツキストなどの過激な学生行動で、その背後には大多数による民主的な社会、享樂的な生き方への渴望がたしかにあったのだ。

精神分析家エリザベート・ルーディネスコと哲学者マチュー・ポットヴィルはそれぞれラカンとフーコーの六八年を語った。六八年の思想と大学アカデミズムにはズレがあり、フーコーやバルトらは当時保守的な大学では教えられておらず、六八年以後になって大学のなかで認められた。五月を通じて、教師と学生、教える一学ぶという権威的關係そのものが問われ、決定的に変化したからだ。誰もが発言権をもちうる状況において、「先生」という存在はいかなる発言をするべきか、あらゆる発言をいかなる方向へと導くべきか。インターネットなどの社会的効果で一見誰もが発言権をもっているようにみえる今日的な状況にも通じる課題が当時、教育現場で提示されたのだ。

バトリス・マニグリエとローラン・ジャンピエールが組織した連続セミナー「理論上の六八年」では、数々のゲストを招いて、五月に関する理論を提示するのではなく、いかにして五月の出来事が独創的な理論的発明を促したのかが検討された³¹。

エチエンヌ・バリバルは「六八年以後、新たな哲学の言説？」³²において、六八

³¹ « Mai 68 en théorie : Paroles contemporaines », dir. par Patrice Maniglier et Laurent Jeanpierre. Centre Pompidou, février-mai 2018.

³² Etienne Balibar « Après 68, nouveau discours philosophique? », Centre Pompidou, 14 mai 2018.



ポンピドゥー・センターにおける2018年4月28-29日の討論会「1968-2018——さまざまな文化革命」。5月14日、エチエンヌ・バリバルの講演「六八年以後、新たな哲学の言説？」写真＝西山雄二。

年の出来事によって、哲学と政治の関係が問い直され、大学アカデミズムの講壇哲学とは異なる哲学的活動家が生まれたとする。六八年は当時絶頂だった「構造主義」を葬り去り、主体や実践、身体や欲望の問題系が回帰した。ただ、彼の問いは、六八年前後の連続でも衰退でもなく、構造主義はいかに変容したのか、である。

ブルデューとアルチュセールが「再生産」の概念を用い、前者は文化的な模倣や教育的継承として、後者は経済的モデルとして分析した。権力に服従し、抵抗の契機を失ってしまうのはいかなる規律化や道徳的有責性によるのか。のちにジュディス・バトラーらがこの問題系を引き継ぎ、生殖やジェンダーの視座が盛り込まれたのだ。また、六八年を境にラカンが反動化し、フーコーが政治化するが、両者とも「言説」を分析対象とした点で共通する。五月はまさに誰もが発言権を得た出来事で、彼らの相違は「話し言葉」への感性ではないか。ラカンの「四つのディスクール」に革命的な言葉の余地はないが、フーコーの言説分析には粗野な言葉への余地があり、サド・ブランショ的な「すべてを言うこと」にも一脈通じている。

フランソワ・キュッセは「五月……政治の祝祭！」³³にて、フランスの五月がまさに祝祭空間の創出だった点を強調する。だが、これまでの五月の解釈において、イデオロギックな政治と文化的祝祭といった分離がなされることでその可能性が矮小化されてきた。社会的な祝祭は資本主義的産業化を被り、反抗のエネルギー源ではなくなってしまう。六八年の今日性のために、政治と祝祭の結合を取り戻すことで「マイナーへの生成変化」（ドゥルーズ＋ガタリ）を誘発し、協同の場を作り出すこと、闘争と笑いの関係を思考し直すこと、占拠の効力を考えること、世界の若々しさというイメージをもつことが提起された。

4. 六八年五月を記念する

六八年五月は周期的に、つまり、1978年、88年、93年、98年、2008年と公的な議論的となり、さまざまな表現で形容されてきた³⁴……「裂け目」（エドガール・モ

³³ François Cusset « Fête de la politique! », Centre Pompidou, 18 mai 2018.

³⁴ 六八年の記念の系譜に関しては、Jean-Pierre Rioux « Événement-mémoire. Quarante ans de commémorations », *Mai 68, Le Débat*, op. cit.が詳しい。

ラン)³⁵、「どこにも見つからない革命」(レーモン・アロン)³⁶、「ユートピア的共産主義」(アラン・トゥーレーヌ)³⁷、「パロールの奪取」(ミシェル・ド・セルトー)³⁸、「怪物的な出来事」(ピエール・ノラ)³⁹、「私たちの精神の片隅に残る青あざ」(ミシェル・ル・ブリ)⁴⁰、「孤児の年代」(ジャン＝クロード・ギユボー)⁴¹、「新たなブルジョ

³⁵ Edgar Morin, Claude Lefort, Jean-Marc Coudray, *Mai 1968 : la brèche : premières réflexions sur les événements*, Fayard, 1968. モランが五月の最中に「ル・モンド」紙に発表した「学生コムニオン」はもっとも早い評論記事で、この騒乱は革命とは異なる仕方で西洋の文明社会に「裂け目」を引き起こしたとされる。2018年もモランはこうした主張を維持していて、「レイモン・アロンは当時見誤っていて、産業社会においてあらゆる大きな問題が根本的に緩和されていくとしたけれども、1973年の経済危機よりもずっと以前に、六八年五月は若者の奥深い精神的危機を露わにしたのだ」と述べている (Edgar Morin et Michel Wieviorka « La réalisation d'un événement impossible », *art. cit.*, p. 58)。

³⁶ Raymond Aron, *La Révolution introuvable. Réflexions sur la révolution de mai*, Fayard, 1968. もっとも早い時期に提示された五月批判の言説の典型。五月の出来事は表面的な変化しかもたらさない「革命もどきの叛乱」にすぎず、学生と労働者の「心理劇」でしかないとされる。

³⁷ Alain Touraine, *Le mouvements de mai ou le communisme utopique*, Seuil, 1968. アラン・トゥーレーヌ『現代の社会闘争』寿里茂・西川潤訳、日本評論社、1970年。2018年、トゥーレーヌは五月について、政治的なインパクトは皆無だったが、計り知れない社会的・文化的な影響を残したと評価する (Alain Touraine et Michel Wieviorka « Du social au culturel », *art. cit.*, p. 42-43)。

³⁸ Michel de Certeau, *La Prise de parole: pour une nouvelle culture*, Desclée de Brouwer, 1968. ミシェル・ド・セルトー『パロールの奪取——新しい文化のために』佐藤和生訳、法政大学出版局、1998年。五月の最中、占拠された大学やオデオン座などでの直接民主的な総会において、「壁の言葉」を書き残すことで、学生も労働者も、誰もが発言権を得たコミュニケーション状況にセルトーは着目する。現在、インターネットによってそうした発言権の全面的な行使は達成されているとみなす向きもあるだろう。ただ、セルトーの議論には前提がある。書き言葉と話し言葉の伝統的分割が聖職者・知識人と庶民の社会的分離をしるしづけてきたのであり、五月の出来事は話し言葉を解放することで爆発的なコミュニケーションをもたらしたとされる。

³⁹ Pierre Nora « L'événement monstre », *Communications*, n° 18, 1972, p. 162-172.

⁴⁰ Michel Le Bris « Comme un bleu au bord de l'âme », *Le Monde*, 15 mai 1978.

⁴¹ Jean-Claude Guillebaud, *Les Années orphelines (1968-1978)*, Seuil, 1978.

ワ社会の揺籃」(レジス・ドブレ)⁴²、「失望で一杯の悲しき気晴らし」(エドゥアール・バラデュール)⁴³、「空虚の時代」(ジル・リポヴェツキー)⁴⁴、「高揚した世代の享乐的な個人主義」(フランソワ・リカール)⁴⁵、「反-人間主義」(リュック・フェリーとアラン・ルノー)⁴⁶、「婉曲な革命」(セルジュ・ジュリー)⁴⁷、「不可能な遺産」(ジャン＝ピエール・ル・ゴフ)⁴⁸……。50年が経った現在、六八年をいかに解釈し、記念

⁴² Régis Debray, *Modeste contribution aux discours et cérémonies officielles du dixième anniversaire*, La Découverte, 1978. ドUBLEはいち早く五月の倒錯的な結果を予見した。「六八年世代」は既成秩序の変革を試み、社会主義的な理想を掲げたものの、実際には、彼ら自身の「成功した反革命」がアメリカ型資本主義のさらなる促進に力を注いだとされる。2018年のインタビューでも、ドUBLEは六八年を「個人にとっては見事な前進だが、集団にとっては大きな後退だった。父親たちの処刑によって『銭金』が花咲く下地が露わになったかのように」と主張をくり返している (Régis Debray, « La mondialisation heureuse, c'est à l'arrivée une balkanisation furieuse », *Le Figaro*, 1 mai 2018)。

⁴³ Édouard Balladur, *L'Arbre de mai*, Atelier Marcel Jullian, 1979. バラデュールは六八年当時、ジョルジュ・ポンピドゥー首相の顧問として騒乱の対応に当たった。回想録『五月の木』では、機動隊の武力行使を抑え、グルネル協定による学生と労働者の分断することで、「現政権がはじめて、抑圧することなく抵抗した」最大の立役者としてポンピドゥーが評価される。

⁴⁴ Gilles Lipovetsky, *L'ère du vide : Essais sur l'individualisme contemporain*, Gallimard, 1983. ジル・リポヴェツキー『空虚の時代——現代個人主義論考』大谷尚文・佐藤竜二訳、法政大学出版局、2003年。

⁴⁵ François Ricard, *La Génération lyrique : essai sur la vie et l'œuvre des premiers-nés du baby-boom*, Flammarion, 1992. リカールのこの世代論によれば、戦後ベビーブームの時期に生まれた若者たちはそれまでの世代と比べて爆発的な人数で、新しい価値観を求めた世代だった。経済成長の最中で彼らの人生は活気に満ちていたが、その反面、彼らは大いに無知だったり、移ろいやすい自己愛に翻弄されたり、社会に対して限らない力をもっていると過信してしまうとされる。

⁴⁶ Luc Ferry, Alain Renaut, *Pensée 68. Essai sur l'anti-humanisme contemporain*, Gallimard, 1985. リュック・フェリー、アラン・ルノー『68年の思想——現代の反人間主義への批判』小野潮訳、法政大学出版局、1998年。

⁴⁷ Serge July « La révolution en creux », *Libération*, 27 mai 1988.

⁴⁸ Jean-Pierre Le Goff, *Mai 68, l'héritage impossible*, La Découverte, 1998. 保守論客を自認するル・ゴフは、六八年の社会的重要性を認めつつも、文化左翼と化した左派が継承しきれない遺産にとどまっていることを批判的に指摘した。2018年にル・ゴフは自伝的な歴史評論を刊行して、新旧の均衡を計ってきたフランス社会が近代化の不可避の潮流のなかで、いかにして六八年の出来事を引き起こしたのかを綴っている (Jean-Pierre Le Goff, *La France d'hier. Récit d'un monde adolescent. Des années 1950 à Mai 68*, Stock, 2018)。

すべきだろうか。

六八年とその影響を否定する言説はつねに一定の幅を利かせてきた。2018年も「フィガロ・マガジン」の特集「六八年五月の本当の総括から50年」にて、反動的発言で知られるジャーナリスト、エリック・ゼムールは論説でこう書いている。「私たちはもはや父親、母親、子供からなる家族ではなく、多様なセクシャリティをもった、権利上平等な個人から『家族をつくった』。家族はもはや、文化的で物質的な遺産を伝達する場ではなく、個々人が開花する場である。まさにこの点で、市場の必然性（消費者化）が旧来の革命幻想（ブルジョワ的家族の破壊）と結びつく。自由主義者がリベルタン（絶対自由主義者）と連携する。性的少数者が倫理的少数者と連携する。共通の敵は異性愛的な西洋の白人男性というわけである」⁴⁹。六八年五月の運動は、家族や国民、政治的権威や歴史的伝承といったさまざまな伝統的価値が問いに付し、西洋社会の崩壊を急速に招いたとされる。

反六八年の思想は六八年当時から存在する。六十年代の社会運動・学生運動は国際的なものであったが、その批判もまた国際的に共通の傾向を帯びている。ニヒリズム、相対主義、エゴイズム、階層秩序の終焉、権威の死、労働価値の破壊、資本主義の道徳的頹廢、犯罪者に対する寛容、愛国主義の破綻などの元凶が六十年にあると喧伝されるのだ。すでに50年が経過した現在、六八年を記念し継承する際、こうした反六八年の趨勢も合わせて検証する必要があるだろう。セルジュ・オディエは『反六八年の思想——知的復権の起源に関する試論』⁵⁰で、反六八年のさまざまな言説を類型的に分析している。オディエによれば、反六八年の思想は三つの流れによって構成される。まず、六八年直後に生じた反動的言説で、すでにこのとき一連

⁴⁹ Éric Zemmour « La désintégration », *Le Figaro magazine*, n° 22878, « 50 ans après le vrai bilan de Mai 68 ».

⁵⁰ Serge Audier, *La pensée anti-68. Essai sur les origines d'une restauration intellectuelle*, La Découverte, 2008. この著作から10年を経て、オディエは、反六八年の言説が保守派や極右の側で、カトリック系の政治家や知識人のあいだで過激化していると分析する。サルコジ大統領以来、六八年嫌悪の言論が蔓延し（たとえば、彼の黒幕だった歴史家パトリック・ビュイツソンの影響力）、アメリカ合衆国のドナルド・トランプ大統領のマイノリティ（移民、黒人、女性）運動に対する敵意や蔑視がこうした趨勢を後押ししている（Serge Audier « Le discours anti-68 s'est radicalisé », *Le Monde*, 15 mars 2018）。

の論点が提示され、これまで反復され変形されてきた。つぎに、反六八年の通俗的解釈で、これは既出の批判をそのつどの歴史的・社会的文脈に応じて寄せ集めたものである。そして、明確に把握することが困難な対象だが、哲学や社会科学における一定の言説が反六八年へと変化する傾向がある。これら三つの言説タイプが相互に関連し合っ、いくつかの反動的な考え方があるタイプから別のタイプへと循環することで反六八年の思想の潮流をなしているという。共通する鍵語は「回帰」で、法治国家への回帰、政治哲学への回帰、自由主義や共和国理念の再生、主体や人間主義の再発見、道徳哲学の復権など、六十年代がもたらした喪失感を埋め合わせようとする意図や欲望が込められている。

六八年の出来事はすでに学校の歴史で教えられ、2016年には中学卒業能力試験にも出題された。「新マガジン・リテレール」誌2018年3月号⁵¹では、アンケートの結果、「六八年五月はフランス社会にもたらした結果は肯定的か、否定的か」という問いに、実に79%が肯定的と回答している。六八年五月のイメージに対しては、「時代遅れになった社会モデルの刷新」「学生のデモ」「好条件での労働と賃金を求める運動」「文化的生活の新たな時代の幕開け」「女性が発言する自由」は70-80%、「機動隊による暴力的な抑圧」が65%、「非行まがいの運動」は26%にとどまった。サルコジの露骨な攻撃や躍進する極右の言説によって、ときに左派知識人によって、六八年は批判されてきた。五月の遺産がある程度精算されたかと思われたが、意外にもフランス人の大半が肯定的な見解を抱いているのだった。

50周年の節目に、ミシェル・ヴィヴィオルカは歴史の周期性という点から六八年を問う⁵²。50年単位で歴史を俯瞰してみるなら、第一次世界大戦が集結した後の1918年から68年のあいだにフランスでは数多くの歴史的な契機があった。世界大恐慌の影響、人民戦線の結成、ファシズムの台頭、第二次世界大戦の勃発、インドシナ戦争とアルジェリア独立戦争などである。だが、1968年から2018年までの周期でこれに匹敵する出来事はさほど多くはないのではないか。大文字の「歴史」の外に世界の動きが出てしまったのではないかとヴィヴィオルカは自問しているが、では

⁵¹ *Le Nouveau Magazine Littéraire*, n° 3, « Mai 68 plébiscité par les Français », mars 2018.

⁵² Michel Wieviorka, « Mai 1968 et les sciences humaines et sociales », *Socio*, « 1968-2018 », No.10, 2018, p. 8.

そうした出来事を記念するとはいかなることなのだろうか。

『記憶の場』を編纂したピエール・ノラはかつて、フランス革命200周年祭と六八年事件をメモリアシオン（記念＝顕彰）の両極端な二つのタイプとした。「フランス革命200周年祭は、意志的で熟慮されたメモリアシオンのモデルを代表する。それは、やらずに済ますことはできないが、うまく管理することもまた不可能で、意図的に記念することの新たな難しさを物語っている。一九六八年五月は、意図的ではなく無意識的ですからあり、制御不可能で、こちらは逆に、記念することなく行動することの新たな難しさを物語っている」⁵³。伝統的な権威を破壊したフランス革命は失われた国民的起源を求めるかのように、メモリアシオン（記念）の反復を必要とする。それは叙事詩的な歴史の統一性を前提として、国民的な統合や調和を再確認する古典的モデルとして社会的に機能してきた。それに対して、五月はその発端からメモリアシオンを要求するかのようだ。五月とは匿名の人々による自然発生的な事件であり、政治的権力を奪取する革命といった実体をともしない出来事であった。「五月は真のメモリアシオンであれば何もがもっている自己言及的な傾向を戯画的なまでに具現している。[...] 出来事は、それ自身にとって、まさに自分の出来事そのものだったのであり、『六八年五月の出来事』という以外には名づけようがなかった」⁵⁴。かくして、五月革命は出来事自体に根本的な変化をもたらした。その起源から生成の試練に曝され続けている出来事こそが、六八年五月ではないか。現存している当事者らの証言が途絶えようとも、緻密な歴史研究による脱神話化が進行しようとも、こうした出来事の力は残るのではないだろうか。50周年でもまた確認されたのは、五月の出来事が私たちの未来への尽き果てぬ歴史的淵源であることだ。

⁵³ ピエール・ノラ「メモリアシオンの変貌」工藤光一訳、『記憶の場3』、岩波書店、2003年、429頁。

⁵⁴ 同前、431頁。